

書評

[評者]
北野邦孝
松戸神経内科・院長



標準的神経治療 しびれ感

日本神経治療学会 監修
福武敏夫, 安藤哲朗, 富本秀和 編

● A5 頁144 2017年4月
定価: 本体3,400円+税
[ISBN978-4-260-03018-2]医学書院刊

この度、日本神経治療学会監修「標準的神経治療」シリーズの一冊として医学書院より『しびれ感』が発刊された。福武敏夫先生ほか気鋭の先生方編著によるもので、診療ガイドラインとして多くの読者が期待するであろうテーマの一つとして選ばれたものである。確かに、日常診療で最も多い主訴は「頭痛」「めまい」「しびれ」と言われるが、前2者については研究や論文も多く独立した書物や神経学書の中で特別に取り上げられ、かなり系統的に記述されることが多い。一方、非常に身近な問題である「しびれ感」は多くは付加的に述べられるにとどまっており、実は十分掘り下げられずに放置されてきた感がある。そのような意味で本書は誠に時機を得た企画であり神経内科医としては非常に興味をそそられる。

本書では、第I～III章で「しびれ感」の概念、解剖・生理学、臨床的な評価など総論的な問題が記述され、第IV章では15に及ぶ疾患、病態について各論的に取り上げられている。特筆すべきことは、本書がしびれ感を単に末梢神経や中枢神経に起因する問題に閉じ込めることなく、多くの原因疾患を横断的に網羅する形で(例えば、パーキンソン病のしびれ感、ALSのしびれ感など)を項目として取り上げていることである。「しびれ感」を編集、執筆された諸先生方の、神経学の対象としてしびれに正面から取り組むという意欲が読み取れる。「しびれ」は「痺れ」とも書かれる多義語であ

り、「痺れ」には「運動麻痺」を表現することもあることは本書でも繰り返し注意を喚起されているが、本書では「しびれ感」あるいは「痛み」という「異常感覚」という感覚系の問題に絞られている。

また、本書は《標準的神経治療》シリーズの一つとして作り上げられているために、症状、徴候、治療に至るまでできるだけエビデンスに基づくということを強く意識して記述されている。もちろん、あらゆる項目(特に症候では)について個人的意見や症例報告レベルを超えるエビデンスが得られるわけではないが、本書では一貫して『Minds 診療ガイドライン作成の手引き2007』に準拠したエビデンスレベル(I～VI)と推奨グレード(A～E)が記載されている。今後、「しびれ感」の診療現場で多くの神経内科医の判断に重要な情報を提供するものと期待される。なお、本書では17のCOLUMNが散りばめられているが、そこでも日常診療で陥りやすい誤りなどがいくつか指摘され、面白く読みながら新しい知識が得られる。第IV章(補)の「痒みについて」では、痒みを伝える特定のC線維の同定など痒みの神経科学の進歩などが述べられていて、まさに“痒いところに手が届く”構成になっている。

本書はしびれをめぐる諸問題に初めて正面から取り組んだ意欲的な好著として広く神経内科医、一般臨床医など神経内科や内科外来診療に携わる全ての方にお薦めしたい。